



異世界キッチンから
こんにちは 2

風見くのえ
Kunoe Kazami

RB

レジーナ文庫

シャガ

虚空を操る
黒豹の魔獣王。
何やら悪事を企んで
いるようで……？

アダラ

闇を操る龍の魔獣王。
天の邪鬼で
人付き合いが苦手。

アスラン

炎を司る獅子の聖獣王。
自信家で偉そうな態度の
“俺さま”だが、
カレンを大切にする
優しいところも。

アウル

風を司る鵬の聖獣王。
陽気な性格で
人間にも友好的。

ウォルフ

大地と緑を司る
狼の聖獣王。
生真面目で
頭が硬い。

カムイ

水と氷を司る
シロクマの聖獣王。
心配性な
お父さん気質。

カレン (大森蓮花)

老舗のお弁当屋の看板娘。
突然、異世界にトリップして、
カレンという新しい名と聖獣を
喚び出せる召喚魔法を授けられた。
喚び出したイケメンな聖獣たちに
助けてもらいながら、
この世界初のお弁当屋を開店する。

目次

異世界キッチンからこんにちは 2

書き下ろし番外編

ハッピーウエディング

異世界キッチンからこんにちは
2

第一章 「お弁当公議」

円盤状の大地が四つ、それぞれ浮きながら重なる不思議な世界。

この世界の第三層に位置する人間界には、四つの国がある。その一つであるヌーガル王国に、一年ほど前、この世界ではじめてのお弁当屋がオープンした。

王都ヨーザンの目抜き通りを一本外れた道沿いにある店舗兼住宅の大きな家がそれで、赤い屋根が目印だ。

お弁当屋の店主——カレンは、仕事が一段落した店のキッチンで、料理をしていた。黒髪のポニーテールを揺らし、上機嫌に手を動かしている。

彼女はとりたてて美人というわけではない、ごく普通の女性だ。しかし、実は彼女はこの世界の住人ではなかった。

以前は、地球の日本でお弁当屋さんに勤めており、大森蓮花^{おおもりれんか}という名前で暮らしていたのだ。

カレンは、手を動かしながらふと思う。

（この世界に来てから、もう一年と五カ月くらい経つのね……。早いものだわ）
ちなみにこの世界の暦は、地球と違う。一週間は十日、一カ月は五週、一年は八カ月である。

こちらの暦で一年と五カ月ほど前のある日、彼女は道路に空いた穴に落ちてしまった。なんとそれは、神さまのメンテナンス不足で地球に空いた穴。そのせいで、彼女はこの世界へやってくる羽目になったのだ。

神さまは謝罪し、翻訳魔法と召喚魔法そしてカレンという新しい名前を授けてくれた。そうして彼女は、言葉も文化もまったく違う異世界で生きていくことになったのだ。

太陽と満月が並んで空にあり、人間以外に聖獣と魔獣と呼ばれる生き物のいる、この世界で——

普通、突然そんな目にあえば、ショックを受けてなかなか立ち直れないものだろう。しかしカレンは、お弁当屋をはじめ毎日元気に暮らしている。

昼食を食べる習慣のなかったこの世界で、カレンのお弁当は一躍大人気になった。今ではカレンの店以外にも王都で数店のお弁当屋が開店している。

お弁当箱も普及し、王都のさまざまな雑貨屋で売られるようになっていた。

（お弁当が人気になってくれて、本当によかったわ。……さて、これでよし、っと）
カレンが皿に料理を盛りつけたちょうどその時、深紅の髪の青年がキッチンを覗きこんだ。

「カレン、準備は……ああ、ちょうどできたみたいだな。行こう、みんなが待ってる」
彼はニツと笑うと、カレンが用意しておいたコーヒーマーサーを持っていった。

「ええ！ 今行くわ」

カレンは皿を手にとると、リビングへ向かった。

——彼が言う「みんな」が、カレンがこの世界でやっていけている、最大の理由だ。

日本では、天涯孤独の身の上だったカレン。彼女は、召喚魔法で喚び出した聖獣や魔獣と、家族になったのだ。

個性的で一癖も二癖もあり、そして何故かイケメン揃いの聖獣や魔獣たちは、今ではカレンの大切な愛すべき家族になっている。

異世界でさまざまなトラブルにあり、それをみんなで乗り越えながら、彼女たちは家族の絆を深めてきた。

家族全員が集まれる広いリビングにカレンが入ると、テーブルの上に六組のカップとソーサーがセットされていた。

そこに揃った家族を見て、カレンは声をかける。

「みんな、お待たせ。今日のおつまみは、フライドポテトよ」

皮をむいたジャガイモを拍子木切りにして、しっかりと洗い、水に十分さらしてから水分をふき取る。薄力粉をまぶして油で二度揚げすれば、美味しいフライドポテトの出来上がりだ。

カレンの明るい声に、部屋の中にいた四人の青年のうちの三人が、椅子から立ち上がった。

「やった！ カレン、トマトケチャップはある？ 俺は、フライドポテトには絶対トマトケチャップだと思っただよね」

カレンに負けない明るい声の持ち主は、アウルという名の青年だ。ふんわりとした虹色の髪をしたイケメンだが、彼の本体は、風を司る鵬の聖獣王。楽しいことが大好きな明るい性格をしている。

「バカを言え。フライドポテトに合うのは、塩コショウに決まっている」

アウルに対して真面目に反論するのは、短い黒髪を後ろに流した背の高い青年だった。彼の名はウォルフ。彼もまた人間ではなく、本体は大地と緑を司る狼の聖獣王だ。

「私は、どちらでもいいぞ」

鷹揚おうように話すのは、短い白銀の髪を持つ大柄な青年だった。彼の名はカムイ。本体は水と氷を司るシロクマの聖獣王だ。お父さん気質のカムイは、家族の中で一番の大食漢たいしょくかんでもある。

「大丈夫よ。どっちも用意してきたわ」

カレンはそう言うと同時に、テーブルの上にアツアツのフライドポテトを置いた。フライドポテトの皿の脇にはトマトケチャップの入った小皿と塩コショウの瓶も、ちゃんと準備してある。

「俺とカレンが二人で作ったフライドポテトだ。ありがたく食べる」

偉そうに言う深紅の髪の青年の名は、アスラン。彼もまた聖獣で、本体は炎つかもとを司る、翼を持つ獅子ししの聖獣王だ。とんでもないイケメンで、性格は俺さまだった。

彼ら四人と、先ほどから椅子に座ったまま動かない長い黒髪の青年——アダラが、カレンの大切な家族である。

アダラは、闇あやむを操る龍の魔獣王。ほかのみんなが聖獣の中で、たった一人だけの魔獣だ。アスランの言葉に、アダラはバカにしたようにフンと笑った。

「偉そうに。どうせ、お前がしたのは芋の皮むきと油の加熱くらいだろう？」

魔獣は、長年聖獣や人間と敵対していた存在である。アダラも最初はカレンたちの敵

だった。

そのせいでカレンの召喚獣となった今も、彼は、みんなとなかなか仲良くなれないでいる。

アダラの言葉を聞いたアスランは、ムツとしたように眉間にしわを寄せた。カレンは慌ててアスランの手を引く。こちらを向いた彼を、視線でなだめた。

アスランは、仕方ないなど言わんばかりの表情をしつつも、眉間のしわを消す。

「確かにその通りだ。油を適温に保つ火加減は難しくてな。苦労した」

「とても上手にやってくれたわよ！ おかげで中はホクホク、外はカリッとした美味おいしいフライドポテトができたもの」

怒りを抑えてくれたアスランへの感謝もこめつつ、カレンは心からの賞賛を送る。彼は青紫の目をスッと細めると、優しく笑った。

その笑みに、カレンはポツと頬を熱くする。

（もう、もう、本当にイケメンなんだから！）

カレンはアスランを特別に思っていた。

異世界に落ちた直後、寂しさと不安に泣いていたカレン。助けてほしいと伸ばした手で、最初に召喚した聖獣がアスランだ。その後も一番そばにいて、彼女を助け、支えて

くれた。俺さまだけどカレンには優しく、いつだって彼女を大切にしてくれる。そんなアスランに恋せずにいられるはずがない。幸いにして、アスランもカレンを愛してくれて、二人は両思いだ。

しかし、カレンは自分の気持ちを伝えていない。そのため二人の仲はジレジレで、あまり進展していなかった。

（だって私、アスランのそばにいと、ドキドキして心臓が破裂しそうになってしまっているんだもの）

日本では、恋人どころか片思いの相手もいなかったカレン。つまり、これが初恋で、カレンは自分の心の変化に戸惑っている。

アスランが好意を素直に伝えてくれるのは嬉しいし、両思いだと思えば天にも昇る心地になる。けれど、ストレートすぎるアスランのアピールに対応しきれず、もう少し余裕が欲しいと思っていた。

そんなカレンの願いと裏腹に、アスランはグイグイ迫ってくる。

今も――

「コーヒーは温めながら俺が淹れる。カレンは座っている」

優しい笑顔を向けたまま、アスランは椅子を引いて彼女を座らせてくれた。その動き

は紳士的で、何よりカレンに対する思いやりに溢れている。

カレンは顔を熱くしたまま、ストンと椅子に腰かけた。

（これ以上、私を好きにさせてどうするの!?!）

そう心の中で悶えてしまう。

そんなカレンを、ほかの聖獣たちは微笑ましく見つめていた。

一方、アスランに軽く躲かれた形になったアダラは、不機嫌そうに眉をひそめている。そのままスツと席を立った。

「アダラ？」

「先に休む」

素っ気なく言って、ドアに向かうアダラ。

「え？ あ、でもコーヒーとフライドポテトは？」

「いらない」

「でも、これから明日のメニューの最終確認もするのに」

お弁当屋のメニューは、カレンが原案を考えている。それをもとに、一日の仕事が終わった後の団欒の時間に、みんなで話し合いながら正式にメニューを決めることになっていた。お茶を飲み、お菓子を食べつつ、自由に意見を言い合う『お弁当会議』の時間

だ。カレンたちは、今まさにそれを開こうとしていた。それなのに、アダラは足を止めない。

「好きに決める」

短くそう言うと、協調性ゼロの魔獣は出ていった。

残されたカレンたちは、困ったように顔を見合わせる。

「やれやれ、まったく。いつまで経っても懐かない蛇だな」

本体が龍のアダラは、蛇にも姿を変えることができると、時々そう呼ばれている。

あきれた様子のカムイはそう言って肩をすくめると、フライドポテトに手を伸ばし、そのままバクリと口に入れた。

「本当に、勝手気ままな奴だよね」

コーヒーにミルクと砂糖をたっぷり入れながら、アウルもぼやく。自由気ままさ加減なら、アウルも負けてはいないと思うのだが、確かにアダラの態度は問題だった。

「魔獣が召喚獣になること自体、はじめてのケースだからな。奴もあれで、いろいろ悩んでいるのかもしれない。……夜はあまり眠れていないようだし」

そう言ったのはウォルフだ。その言葉にカレンは目を睜る。

「アダラ、眠れていないの？ どうしてわかるの？」

心配するカレンの隣に腰かけながら、アスランが彼女の頭にボンと手を置いた。

「聖獣も魔獣も気配に敏感だからな。同じ家の中にいる奴が寝ているかどうかくらいはわかる」

「そうなの……」

「でも、大丈夫。元々、聖獣も魔獣も、人間のようによくぐっすり眠ることは少ないんだ。

夜眠れないからといって、そんなに心配する必要はない」

アスランは、なだめるようにカレンの頭を撫でた。

「それでも心配だわ。眠れないから、いつもあんなに不機嫌なのかもしれないし。眠れるように、何か手を打てないかしら」

真剣にアダラのことを考え、うつむくカレン。

アスランは、少し不服そうに顔をしかめた。

「……なんだか妬けるな」

ポツリと呟いた。

「え？」

「いや、なんでもない。……アダラの話は、俺たちも考えてみる。だから一人でそう悩むな。それより、お弁当会議をしないとイケないだろう？」

アスランの言葉に、カレンはハッとする。確かにその通りだった。

「そうそう。それに、早く会議をはじめないと、お茶請けがなくなっちゃいそうだよ」
アウル言葉に、カレンは慌てて顔を上げた。見れば、お皿に山盛りあったフライドポテトが半分くらいに減っている。

みんながあきれたように見る先では、カムイがトマトケチャップと塩コショウの両方をつけたフライドポテトを、黙々と食べていた。

「きゃあつ！ カムイ、いくらなんでも食べすぎよ！」

いつの間にか、カムイはアダラの分のコーヒーまで自分の手元に引き寄せている。
大食漢のカムイの手は止まらない。

その日の団欒は、カムイが食べすぎだという話で紛糾したのだった。

翌日の団欒の時間、カレンはアダラのカップにハーブティーを淹れ、彼の前に置いた。
「カモミールティーよ。カモミールは気分をリラックスさせてくれて、安眠効果があるって言われているの。アダラがあまり眠れていないんじゃないかって聞いたから。試してみて」

大地と緑の聖獣王であるウォルフに、不眠に効くと思われるハーブをたくさん生やし

てもらった。カモミールにバジル、ラベンダーなど、不眠症に効能があると言われるハーブは数多くある。アダラに合うものを見つけるべく、いろいろ試してみるつもりだ。

「お茶請けは、ラベンダーのクッキーにしてみたの。色合いもきれいで、美味しそうですね？」

ニコニコとクッキーを差し出すカレン。

アダラは驚いたように彼女を見た。

「……俺のために作ったのか？」

カレンは、こくりと頷く。

「悩みや困っていることがあるなら、話してくれると嬉しいけど……。それができなくても、私にできることをしたいから」

魔獣ではじめて、人間の召喚獣になったアダラ。その葛藤は大きく、いろいろ悩んでいるのかもしれない。

しかし、眠れていないことも、その原因も、アダラが自分で言うとは思えなかった。たとえ教えてもらえたとしても、魔獣であるがゆえの悩みをカレンが解決できる保証はない。

だから、カレンは、まず自分のことをしたいと思ったのだ。

「飲んでみて。気に入ってくれたら、毎日淹ひれるわ」
カレンにすすめられ、アダラはカモミールティーを口に含む。コクンと飲んで、ほおと息を吐いた。

「これはリンゴの香りか？ 不思議と優しい味だな」

いつも険けわしいアダラの表情が少し和やわらいで見えて、カレンは嬉しくなる。

「もし甘い方がよかったら、蜂蜜もあるわよ。カムイが集めてくれたの。ウォルフはたくさんハーブを生やしてくれてね。カモミールを乾燥してくれたのはアスランとアウルよ」

カレンの言葉に、アダラは驚いたようにアスランたちを見た。聖獣たちは、みな苦笑している。

「カレンの望みを叶えないわけにはいかないからな」

言い訳みたいなアスランの言葉に、アダラはフツと笑った。

「お人好しな聖獣だな」

「お人好しで何が悪い！」

「別に。……悪くない」

そう言ったアダラは、今度はクッキーに手を伸ばす。彼が自分からお菓子を食べよう

とするのは、はじめてだ。一口食べた瞬間、アダラは嬉しそうに口角を上げた。

「……これも、悪くない」

アダラの言葉を聞いたカレンは、とても嬉しくなる。うきうきとテーブルにつけば、アスランたちも安心したように笑う。

その日の会議で、アダラが席を立つことはなかった。

次の日の昼前、カレンとアスランは王都を囲む外門の西口にお弁当を配達に行った。その帰り道で、カレンはアスランにアダラの不眠解消策を相談する。

この時間帯、外門から続く大通りは、大勢の人でごった返している。徒歩の人が多いが、中には馬に乗った人や馬車を使う人もいて、賑にぎやかな通りは王都ヨーザンの繁栄ぶりをよく表していた。

「不眠にいいのは、やっぱりリラックスすることなのよね。お風呂にゆっくり入るとか、気持ちのいい音楽を聴くとか。アロマテラピーもいって言われているわ」

考えながら一生懸命に話すカレン。

「——アスラン、どれがいいと思う？」

思いつく限りの不眠解消策を挙げたカレンは、隣を歩くアスランを見上げながらたず

ねた。

雑踏の中でも目立つほど背の高い青年は、派手な深紅の髪をかき上げ、ため息をつく。しかも、彼は複雑な表情をしていた。

「なんだか様子がおかしい。カレンは心配して彼の顔を覗きこんだ。」

「アスラン、どうしたの？」

「ああ。いや、自分の心の狭さに、がっかりしているだけだ」

カレンは、わけがわからずに首を傾げる。

「カレンは、優しすぎる」

ポツリとアスランは呟いた。

「そんなことないわ」

「あるさ。現に今も、なかなか俺たちに馴染めず眠れないアダラを心から心配して、いろいろ解決策を考え、実行しようとしている。その優しさは、何より好ましいカレンの長所で、大切にしたい。……だが、俺が隣にいるのに、カレンがアダラのことばかり話すことに、俺は嫉妬しているんだ」

心底情けなさそうに告げられたアスランの言葉に、カレンはびっくりする。

アスランは、苦しげにカレンを見つめていた。青紫色の瞳がカレンを映し、彼女の胸

はドクンと高鳴る。

アスランがヤキモチを焼いてくれているのかと思うと、嬉しいような、恥ずかしいような——逃げ出したいような、自分でもわけのわからない気持ちがかみ上げてくる。

「ア、アスラン——」

「お前の目に映るのが、俺だけならいいのに」

熱のこもった言葉と同時に、アスランはカレンの方に手を伸ばしてきた。大きく男らしい手が近づいてきて、心臓が爆発しそうになったカレンは、思わずピクツと体を震わせる。

彼女が怯えていると思ったのだろう、アスランの手が止まった。

「どちらも動けない、時が停止したような瞬間——」

突如、ガラガラと大きな音が響く。アスランは慌ててカレンを抱きかかえると、道の端に寄った。見れば、ほかの通行人も焦った様子で道をあけている。

そこへ、六頭の馬に引かれた大きな馬車が現れた。木製の車体に白い幌をかけた馬車で、十人ほど乗れる大きさだ。石畳の道路の上を、大きな音を立てて走っていった。

「駅馬車か。通行人が多いのに、かなり飛ばしているな。……危ないだろう？」

駅馬車とは、この世界の一般的な移動手段である。王都と主だった都市の間や、その

都市と小さな町の間で定期的に運行されている。

アスランは眉間にしわを寄せ、去っていく馬車を不機嫌そうに睨みつけた。

一方カレンは、駅馬車どころではない。カレンを抱きかかえたアスランが、まだ彼女を離してくれないせいで。アスランの大きな手は華奢なカレンの腰と頭を支え、遅しい彼の胸に彼女の頬を押し付けている。ドクドクとダイレクトに感じるアスランの鼓動に、カレンの顔は熱くなった。

「大丈夫か、カレン？ ケガはないか？」

アスランはそう声をかけながら、彼女の顔を覗きこんでくる。

カレンの顔は、きつと真っ赤になっているだろう。そんな顔を見られたくなくて、カレンはアスランの胸に顔を押し付けた。

「カ、カレン!？」

「見ないで。私、今、すごくみっともない顔をしている」

さらに密着したせいで、アスランも動揺しようだ。

「……カレン!」

焦ったような声を上げるアスラン。カレンの耳に届く彼の鼓動が、速くなっていく。

アスランが体を離そうとしたのを察して、カレンはイヤイヤと首を横に振り、ますま

す彼にしがみついた。

「ああっ……くっそ！ 可愛すぎるだろう」

そう言うや否や、アスランはカレンを抱く手に力をこめる。

カレンが正気に戻るまで、二人はしばらく人通りの多い道端で抱き合っていた。周囲から、「滅べ、バカップル」という不穏な声が聞こえたが、テンパっていたカレンは、それが自分たちに向けられた言葉だと気がつかなかった。

その日、アダラのために作った、気分を落ち着かせ安眠に導くアロマオイルを、自分も使ったカレンだった。

カレンたちの努力が功を奏したのか、数日後には、アダラは少し落ち着いてきた。

夜のお弁当会議から抜け出すこともなくなったし、何よりよく眠れているようだ。

「どうにもならないことを悩んで、夜中にお前たちの歌を聴かされるのはごめんだからな」

いろいろ試してみた不眠症対策で、アダラに一番不評だったのが、聖獣たちによる子守歌の合唱だ。イケメンでなんでもできる印象のアスランたちだが、唯一、歌は苦手らしい。彼らの歌を聴いたアダラは、「拷問か」と叫びた。

カレンの歌だけならなんとか聴けるのだが、アダラの枕元でカレンが歌うことを、アスランが断固として許してくれなかった。「安眠」じゃなく、永眠」させてしまおうだ」と呟くアスランの言葉を聞いて、歌うのを断念したカレンだ。

「まあ、でも歌を聴かされるのが嫌で悩むのをやめたんだから、ある意味一番効果があったのかもしれないよね？」

能天気なアウル言葉に、アダラは顔をしかめる。

カレンは苦笑しつつ、口を開いた。

「ともかく、よかったわ。家族は団結してきたし、お店の売り上げも上々だし——このあたりで一つ、新たなお弁当普及作戦をはじめたいんだけど、どうかしら？」

「新たなお弁当普及作戦？」

カムイが首を傾げる。

「なんだ？ それは」

ウォルフも真面目な顔で聞いてくる。

経営が順調にいつている時でも、企業はそれに安心して成長を怠^{おぼた}っていない。いつでも先を見て、新たな戦略を立てる必要がある。

「私が新たに作りたいのは、お弁当よ。この世界には駅馬車があるんだもの。だった

ら駅弁も流行^{はや}らせたいわ」

カレンは胸を張って、そう言った。

一方、アスランたちは不思議そうな表情を浮かべている。

「エキベン？」

カレンは彼らに、駅弁とはどういうものかを説明した。

先日、アスランに駅馬車から庇^{かば}われて、ちょっと恥ずかしい思いをしたカレン。しかし、それをきっかけに駅弁を思い出したのだ。

お弁当好きのカレンは、実は大の駅弁ファンでもある。地方それぞれの特色を活かした駅弁をこよなく愛し、休日には駅弁を食べるために電車で旅行していたくらいだ。

「いろいろな場所の名物を駅弁にすれば、旅行の楽しみも増えると思うの。それに、お弁当は王都以外ではあまり知られていないから、駅弁が広がれば地方に宣伝することもできるわ。ね、いいアイデアでしょう？」

カレンに聞かれて、アスランたちは少し考え込む。

「確かに、不可能なことではないと思うが……」

難しい顔でそう言ったのは、ウォルフだ。

「旅をしながらお弁当を食べるのか。俺は、面白そうだと思うけど」

アウルは少し乗り気だ。

「ふうむ、あんまりイメージが掴めないな」

カムイは首を傾げる。

「あの駅馬車に乗りながら、お弁当を食べるのか？」

アスランの眉間にしわが刻まれる。

「……そもそも、馬車とはなんだ？」

アダラに至っては、そこからだった。

みんなに見つめられて、カレンは考え込む。

「そうね。そういうえば、私も馬車に乗ったことはないわ。まずは、みんなでお弁当を持って駅馬車に乗ってみたい？」百聞は一見にしかず。それから考えればいいわよね」

カレンの提案で、次のお休みに、全員一緒に駅馬車に乗ることが決まったのだった。

「考えてみたら、みんなで旅行なんてはじめてよね？」

駅馬車に乗る日、朝からカレンはワクワクしていた。

もちろん、カレンたちも休みの日に出かけることはある。王都をブラブラしたり、カレンがこの世界に来た当初暮らしていた島に行ったりと、カレンたちの行動範囲は広い。

ただ、遠くに行く時は聖獣の能力を使って移動するため、人間の交通機関を使うことがなかった。

旅行といえば、車や電車、飛行機などの交通機関を使って移動するイメージを持つカレンである。今日、駅馬車に乗ることは、異世界に来てはじめての旅行という感覚だ。

（しかも、これって家族旅行よね！）

家族に憧れるカレンにとって、家族旅行も当然憧れの行事だった。ワクワクしないわけがない。

「あんまりはしゃぐなよ」

そんなカレンを、アスランは心配そうに見る。それから、各々が持つ大きな包みに目を落とした。

「駅弁……だったか？ これも、こんなにたくさん作る必要はなかったんじゃないのか？」

大きな包みの中はすべてお弁当。カレンがいろいろ作った試作品だ。

「だって、なかなか候補を絞れなかったから。駅弁って本当に種類が多くて、どれもとても美味しいのよ！」

イカめしに鶏めし、釜めしもあれば、牛そぼろや鶏そぼろ、海鮮弁当と、駅弁の種類

は多い。商品化するなら地域の特色を活かしたものを作るべきだが、今日は単なるお試しなので、思いつくままにお弁当を作った。その結果、包みが大きくなってしまったのだ。

「大丈夫だ。私一人でもすべて食べられる自信がある」

そう言い切るのは、大食漢のカムイ。それはそれで、問題発言だった。

「いいから、早く行こうよ。カレンの隣に座るのは俺だからね」

アウルも浮かれているのか、今にも飛び立ってしまいそうだ。

「バカを言え。カレンの隣は俺に決まっている」

慌ててアウルに抗議するアスラン。ウォルフとアダラは、あきれたように肩をすくめた。

「フフ、楽しみよね。さあ、行きましよう！」

意気揚々とカレンたちは、駅馬車を目指した。

——そして、一時間後。

待望の駅馬車に乗ったカレンたちは、想定外のことにびっくり仰天していた。

「……くっ！ まさかつ、馬車がこんな……っ、揺れるだ、なんて！」

「カレン！ 喋るな！」

座席の上で跳ね上がりそうになるカレンの体を、隣に座ったアスランが抱き寄せる。

「そうそう！ ……迂闊に、喋ったりしたら、舌を嚙っ……っ痛あ！！」



舌を噛むと注意してくれようとしたアウル自身が舌を噛み、痛みにうずくまる。家族六人で気兼ねなく旅行をしようと、カレンたちは駅馬車一台を貸し切って出発した。そこまではよかったのだが、この世界の駅馬車は、とんでもなく揺れるのだ。

(そういうえば、車輪が木製で、ゴムじゃなかったような)

カレンは乗る前に見た馬車を思い出す。

王都近郊の城下町の道路は石畳だったので、揺れも少しはましだった。しかし、城下町を出た途端、舗装されていない道路が続き、揺れはますますひどくなった。

これでは、馬車の中でお弁当を食べるなんて、夢のまた夢だ。

(ひよっとしてスプリングもないんじゃないの?)

カレンは学生時代、修学旅行で古今東西の乗り物を展示している博物館に行ったことがあった。その中には馬車も展示しており、構造の解説が脇に書いてあったのを覚えている。見学時間がやけに長く、隅から隅までじっくり読んでしまったのだ。

(鋼で作った板バネが馬車の振動を吸収しているって、書いてあったと思うけど……この様子じゃ、こっちの世界の馬車には、板バネがついてないとか思えないわよね)

ガタガタガタと、この世の終わりのように揺れる馬車。この世界の人々はみんな、こんな馬車に長時間揺られて旅をするのだろうか?

(とてもじゃないけど、耐えられないわ!)

早々に音を上げたカレンたちは、目的地に着く前に馬車を停めて降りてしまった。そこは野原のど真ん中で、民家も何もない場所だ。

駅馬車の御者は、本当にここでもいいのかと心配しながら帰っていく。聖獣や魔獣の力で移動できるカレンたちには、いらぬ心配だった。

「でも、せっかく来たんですもの。帰る前に、ここでお弁当を食べましょう」

野原に敷物を敷くと、そこでお弁当を広げる。馬車に揺られたお弁当の中身は、ぐちゃぐちゃになつていた。

食べられないわけではないが、あまりの惨状にカレンは大きなため息をつく。

「駅弁は、ダメだな」

お弁当の蓋にベッタリくっついた牛そばろを悲しそうに見ながら、カムイが言った。カレンはグツと唇を噛む。

「……………諦めるのか?」

バラバラになったイカめしを器用に箸でつまみつつ、ア达拉が聞いてきた。その声はなんだか挑発的だ。

「イヤよ!」

思わず、カレンはそう答えていた。

「カレン？」

驚いたようにアスランが彼女を呼ぶ。アダラは、ニヤリと笑った。

「そう言うと思った」

満足げに言うのと、アダラはバクリとイカめしを口に放り込む。よく囓かんで、ゴクリと呑みこんだ。

「それで、どうするんだ？」

挑発的な口調をあらためないアダラに、アスランは顔をしかめる。怒ろうとした彼を、カレンは止めた。

「アスラン、みんな、私は駅弁を諦めたくない」

きっぱり宣言する。アダラを除いた聖獣たちは、ぐちゃぐちゃのお弁当を複雑な顔で見つめた。

「なんとかできるのか？」

心配そうなアスランの問いかけに、カレンは頷うなずく。

「なんとかするわ！ 本当は、駅馬車が揺れなくなるよう改良できればいいんだけど……。それは今の私たちの力では難しいから、ほかの方法を探してみるわ」

もちろん、簡単なことではないだろう。それでもこのまま駅弁を諦めるのは嫌だった。わがままを言っているという自覚のあるカレンは、少しうつむく。

「反対されると思ったが——」

「わかった。協力しよう」

あっさりとして、ウォルフはそう言った。アウルも「わかった」と言って、ケロリと笑う。「我らにとつて大切なのは、何より主あるじの心こころだ。主の思いを叶えるために、我らは召喚獣になった。主が駅弁を作りたいのであれば、作ればいい。主のためならば、我らは努力を惜おしまない」

カムイはそんなことを言うと、蓋ふたについた牛そぼろをペロリと舐なめた。お行儀の悪い行為だが、カレンは呆気にとられて、咎とがめることも忘れてしまう。

「——カレン」

仕方ないなどでも言うように笑い、アスランがカレンの手に自分の手を重ねてきた。

「お前が俺たちに遠慮をする必要はない。遠慮なんてされたら、俺たちが悲しい」

優しいアスランの声に、カレンの胸はトクトクと高鳴る。そして、彼は手をキュッと握にぎってきた。

「本音を言えば、俺は、駅弁は諦めてほしいと思う。とてもできそうにないからな」

おかずに散らばったお弁当を見ながら、アスランは冷静にそう分析する。「失敗してお前が傷つく姿を見たくない。……でも、それがカレンの望みなら、俺は——俺たちは、全力でお前の望みを叶えよう」

それは、カレンがお弁当屋をやりたいと決意した時と同じ言葉だった。あの時もアスランたちは、カレンの夢を後押ししてくれたのだ。

「アスラン、みんな」

見回せば、みんな優しく頷いてくれる。ア达拉だけは皮肉な笑みを浮かべていたが、その目はなんだか優しく見えた。

感極まったカレンは、思わずアスランに抱きついてしまう。アスランもギュッと抱きしめ返してくれた。

しばらくそのままだった二人に、ゴホンとカムイが咳払いをする。それも、カレンがお弁当屋をやりたいと言った時と同じ流れだ。

アスランとカレンは顔を見合わせ、クスクスと笑い出した。

カムイやウォルフ、アウルも優しく笑ってくれる。

「望みを言え。カレン」

アスランの言葉に促され、カレンは宣言した。

「私、駅弁を作るわ！　そしてこの世界に広めるの。……みんな、力を貸して！」

「承知した」

「主の望むままに」

「わかったよ」

「……やりたいようにやればいいだろう」

ウォルフ、カムイ、アウル、ア达拉も頷く。

「カレン、お前の望みを叶えよう」

アスランの言葉に、心の底から喜びが溢れ出した。絶対に駅弁を成功させようと決意するカレンだった。

とはいえ、ことはそれほど簡単ではなかった。

その後も何度か駅馬車に乗ったのだが、ひどい揺れはどうにもできない。お弁当を食べるところか、ぐちゃぐちゃにならないようにするのさえ、難しいありさまだ。

(クツションを持ち込めば、少しはましになると思ったんだけど)

まず、揺れをやわらげるものがあつたら、と綿がたっぷり入ったクツションを持って再びチャレンジしてみた。しかし、馬車ごと大きく揺らされてしまえば、クツションな

んか気休めだ。お尻が痛くなるのはなんとか防げたが、お弁当が崩れるのは避けられなかった。

「駅弁作りをはじめて一カ月。」

いつものようにお弁当を城の兵士に配達した後、カレンはアスランと駅弁について話し合っていた。

「この世界の人ってすごいわよね。どうしてあの駅馬車に乗っていられるのかしら？」

「慣れだろう」

城の中庭には等間隔で木立が並んでいる。木漏れ日の中を二人並んで歩く。

「考えたんだけれど……あれだけ揺れたら、たとえお弁当を食べられたとしても、気持ちが悪くなっちゃうんじゃないかしら？」

「あの揺れに慣れてるんだ。平気だろう」

アスランはけろりと言う。

そういう人もいるかもしれないが、自分は絶対ムリだ。この世界の住民にしたって、全員が全員馬車に乗り慣れてるわけではない。だとすれば、カレンと同じように揺れに酔う者も大勢いるはずだった。

(やっぱり、馬車の揺れそのものを改善するしかないのよね)

歩きながら考え込むカレン。そこで――

「ああ、ここにいたのか。会えてよかった」

背後から声をかけられた。

カレンとアスランは慌てて振り向く。

「アルヴィンさま！」

振り返った先にいたのは、アルヴィン・リード。ここスーガル王国の王弟にして、元帥でもある人物だった。

「アル」と呼んでほしいと、いつも言っているのに。カレンさんは遠慮深いな」

間違いなく偉い人物なのだが、とても気さくな人柄だ。今もアルヴィンは、カレンを見てニコニコと嬉しそうに笑いながら、気安く近づいてくる。

「まあ、そこも魅力的なのだが」

そのアルヴィンの前に、アスランがスツと立ちはだかった。カレンを背中隠すように庇い、睨みつける。

「なんの用だ？」

「相変わらず、アスラン君のシスコンぶりは揺るぎないな」

「俺とカレンは兄妹じゃないと、いつも言っているだろう！」

言い争う二人。片や王族で、片やただのお弁当屋の店員だ。アスランは獅子の聖獣王だが、正体を隠しているため、アルヴィンは彼を一般の国民だと思っているはずだ。アスランの態度は、本来なら不敬罪で投獄とうごくされても文句の言えないものだったが、二人ともそれを気にした風もない。

実は、これはいつもの光景なのだ。中庭にいる城の騎士たちも『またはじまったか』という雰囲気ふんいきで、のんびりとこちらを見ている。

（まあ、アスランは俺さまだものね）

たとえ誰が相手であろうとも、かしまるアスランなど想像もできない。

それを受け入れるアルヴィンの方こそが、変わり者と言えるだろう。

（度量が大きいっていうのかしら？ ……極度のヘタレってだけかもしれないけれど）

今年三十歳の元帥閣下げんすいは、黙っていれば威厳も貫禄かんろくもある。しかし、口を開いた瞬間、それをすべてぶち壊す残念な人になり下がる、といわれる人物でもあった。

しかも発言のチャラさに行動力が伴ともなわない、いわゆるヘタレだ。清純でおしとやかな女性に憧れるアルヴィンが、思いを告げられずに失恋ばかりしていることは、城中知らぬ者のいない事実である。

（いい人だとは思うけど）

周囲の者に身分差を感じさせず、親しみやすい振る舞いをするアルヴィンには、好感が持てる。だからと言って、カレンが彼に恋ができるかといえば、そうではなかった。

何より、カレンの心の中には、すでにアスランがいる。

（それに、多分アルヴィンさまも、私のことが本気で好きなわけじゃないわよね）

極度のヘタレの称号を持つアルヴィン。もしも彼が本気でカレンを好きならば、こんなに気安く声をかけられるはずがない。

（だからアスランも、そんなに威嚇いかくする必要はないのに）

アスランは、アルヴィンに対し、牙きはをむき出さんばかりだ。

あきれれる一方で、そんなアスランが嬉しいカレンだった。

「用があるならさっさと言え！」

「まったく、心の狭い男だな。それではカレンさんに愛想をつかされてしまっぞ」

「つく！ ……早く用件を言え！」

アルヴィンはやれやれと肩をすくめる。

「一言、礼を言いたかったのだよ。——君たちのおかげで、城のお弁当プロジェクトは大成功だ。城の騎士たちの働はたらきが格段によくなった。昨日、調査結果がまとまったのだが、特に夕刻の作業効率が、お弁当の支給をはじめの前と後とでは大きく違う。いや、ここ

まで差が出るとは、正直思わなかった。お弁当自体も美味しいと評判で、今では休日よりもお弁当を食べられる勤務日の方が楽しみだ、と言う騎士もいるくらいだ。当然、皆のモチベーションも上がっている。……ありがとう」

上機嫌に笑うアルヴィン。

カレンは、じーんと喜びを噛みしめた。

昼食を食べる習慣がなく、一日二食のこの世界。人々は一日六、七時間ほど昼休憩なしで働いていた。そこへカレンがお弁当文化を持ち込んだのだ。

はじめ、王都の外門にお弁当を配達していたら、お弁当を食べていた騎士の仕事の効率が上がったらしい。その話を聞きつけた元帥は、城の騎士にもお弁当を配る——お弁当プロジェクトを立案したのだ。カレンたちはそれに協力していた。

お弁当を食べれば、エネルギー補給と同時に休憩もとれる。作業効率上がるのは、わかっていたことだったが、実証できたのは嬉しかった。

「そんな風に言っていただけで、すごく嬉しいです。これからも、もっとたくさんの方にお弁当のよさを知っていただけるように、がんばりますね！」

両手を握り締め、力をこめるカレン。

アルヴィンは、眩しそうに彼女を見つめた。

「私もできる限り協力しよう。何か困っていたり、私が力になれることはないか？」
そんな申し出までしてくれる。

「だったら、さっさと自分の持ち場に帰れ。俺たちにこれ以上近づくな」

しかし、アスランは敵意をなくさなかった。アルヴィンをカレンに近づけまいとして、シッシと追い払う仕事までする。

「もう、アスランったら、せっかくアルヴィンさまが親切に言ってくださっているのに」
カレンはアスランをたしなめた。

不満いっぱいの顔で、アスランは黙り込む。

独占欲を隠さないアスランを軽く睨んでから、カレンはあらためてアルヴィンに向き合った。

これは、絶好の機会だ。

「本当にお願いしてもいいですか？」

「ああ。私にできることであれば」

アルヴィンの肯定を確認して、カレンは話しはじめた。

「実は、私、お弁当を広める次の策として、駅弁^{えきべん}を考えているんです」

そう言ってカレンは、駅弁についてアルヴィンに説明する。全国各地で駅弁を作り、

駅馬車の乗客に食べてもらいたいこと。しかし、今の駅馬車では揺れがひどくて、とても駅弁を食べられないことも伝える。

「——だから、できれば、馬車の揺れを抑えるために、馬車の改造をしたいんです！」
アルヴィンは驚いたように目を見開いた。

「そんなことができるのか？」

「はい」

カレンは頷いて、説明を続ける。

まず、馬車の木の車輪の外周にゴムを取りつけること。そして板バネを作り、馬車をスプリング付きに改造することを提案する。

「フーム。すごいな。それは、カムイ殿の知識なのか？」

アルヴィンは、唸った。カレンが異世界人だと知らない彼は、この世界にないものはすべて聖獣によるものだと思っているようだ。

ちなみに、カレンの召喚獣の中でカムイだけが、聖獣だと一部の者にバレている。ほかの店員も聖獣で、ましてや魔獣までいると知られたら大騒ぎになるため、それは秘密にしてきた。

少し考えれば、馬車を使う必要のない聖獣が馬車の知識など持っているはずもないと

気づくのだろうが——思い込みというのは恐ろしい。

その方が都合のいいカレンは、「はい」と頷いた。

「馬車が揺れなければ、馬車の中でお弁当が食べられます。そうしたら、馬車の駅でお弁当を売ろうと思っっているんです。そしてゆくゆくは、駅弁が普及して——」

よどみなく、駅弁の魅力を語るカレン。

そのあまりの熱意に、アルヴィンは若干引き気味になった。

「駅弁うんぬんの前に、馬車の揺れを軽減するという発明そのものが、素晴らしいと思うが」

「もちろんです。お弁当がぐちゃぐちゃになりませんからね」

「お弁当よりも——」

何かを言いたそうにしていたアルヴィンだが、カレンと目が合うと「いや、まあいい」と呟く。それから微笑んで、ため息をついた。

「カレンさんにはいろいろと世話になっているからな。馬車の発展のためにもいい話のようだし、できる限り協力しよう」

最終的にアルヴィンは、そう言ってくれる。

カレンは、大喜びした。

「やったわ！ アスラン」

感極まって、アスランに飛びつく。

「……そこは、私に感謝して飛びついてくれる流れじゃないのか？」

不服そうにアルヴェインが文句を言うが、それどころではない。

「嬉しい！ 私、駅弁を作るのね」

当然、アスランもカレンを上機嫌で抱きしめ返した。

「よかったな。カレン」

「ええ。私、絶対に美味^おしい駅弁を作るわ！」

ここに、駅弁のための駅馬車改造計画が発動したのだった。

第二章 「いじめられっ子と愛妻弁当」

アルヴェインに馬車の改良をお願いしてから、早三カ月。

「アルヴェインの領地のゴムの木からは、順調にラテックスが集められているぞ」

ラテックスとはゴムの木の樹液で、この樹液からゴムを作る。大地と緑の聖獣王ウォルフは、頻繁にゴムの木の様子を見に行き、報告してくれた。

「鍛冶屋も板バネを完成させたようだな」

炎の聖獣王アスランは、鍛冶屋の様子を見てきてくれる。

「馬車工房もようやくサスペンションの設計図を完成させたよ」

サスペンションとは、車輪と車体を接続し、地面から受ける衝撃を吸収する緩衝装置である。新しいものが好きなアウルは、馬車工房に行つては進行具合を教えてくれた。

馬車の揺れは、馬車工房でもなんとかしたいと試行錯誤^{しつごくさくご}していた問題らしい。アルヴェインの話聞いた工房は、大喜びで改良に取り組んでくれている。

念願のスプリング付き馬車は、順調に完成に近づいていた。

発案者であるカレンは、何かと助言を請われたりして、忙しい日々を送っていた。それでもなんとかなっているのは、みんな力で力を合わせているからだ。

(アダラもがんばってくれるようになったし)

ただ問題が一つ。それはアダラの接客態度だった。人間嫌いのアダラは、お店のお客さんに対して、愛想の欠片かけらもないのだ。

(少しくらい笑っても、ばちは当たらないと思うんだけど)

そういえば、ずっと一緒にいるカレンたちでさえ、アダラの笑った顔など滅多めつたに見ない。そんなアダラを店番に置けるはずもなく、彼には、お弁当の食材調達などの外仕事を多くお願いしていた。

今日も調味料の買い出しに行ってくれているのだが、帰りがちよっと遅い気がする。

(まあ、小さい子供じゃないんだから、心配する必要はないわよね)

リビングで来週のメニューの原案を考えていたカレンは、グンと伸びをしながら立ち上がった。気分転換にコーヒーを淹いれよう。

「カムイ！ コーヒーを淹いれようと思うの。冷凍保存した焙煎豆ばいせんまめを出してくれない？」

インスタントコーヒーもあるが、今日は豆から淹いれようと、カレンは隣のキッチンにいるカムイを呼んだ。水と水を司つかさどる彼は、冷凍保存を管理してくれている。

焙煎ばいせんしたコーヒー豆の最適な保存法は冷凍することだ。カレンは、ウォルフの力で手

に入れてもらった生豆きまめを、アスランに焙煎ばいせんしてもらい冷凍保存していた。焙煎ばいせんしたてより、焙煎ばいせんして冷凍庫で三日ぐらい保存してからの方が、カレンは好きなのだ。

「コーヒーか、いいな」

カムイを呼んだのに、先にアスランが顔を出した。アスランは大のコーヒー好きだ。

「じゃあアスランは、豆を挽ひくのをお願い」

カレンの言葉に、アスランは笑って頷うなずいた。自然に近寄り、そばに立つ。

以前はドキドキして逃げ出したくなったこの距離感が、カレンは最近、平気になった。慣れたということだろうか、むしろ近くにいないと寂しいと思ってしまう。

「もちろん私たちも一緒に飲もう。豆は多めに出した方がいいな」

カムイと一緒に、ウォルフやアウルもやってきた。

リビングは、店舗兼住宅であるこの家の真ん中にあり、店やキッチン、玄関、裏庭からも自由に入入りできるようになっていた。カレンたちの私室のある二階に続く階段も、ここを通り抜けなければいけない構造だ。そのため、自然にみんなリビングに集まるようになっていた。

カレンは「そうね」と笑いながら、コーヒークップを用意する。

「アダラも帰ってくる頃なんだけど、一緒にコーヒーを淹れてもいいかしら？」
 「ああ、そうだな。夜も問題なく眠れているようだし、もうハーブティーでなくてもいいだろう」

アスランも笑ってそう言った。

しばらくして、コーヒーがカップに注がれ、リビングが香ばしい匂いに包まれた。ちょうどそのタイミングで、バタンとドアが開く。リビングに入ってきたのは、アダラだった。買い物が終わわり、帰ってきたらしい。

「あ、アダラ、おかえりなさい。ご苦労様」

カレンの声にアダラは素っ気なく頷いた。

以前であれば、アダラのそんな態度に眉間のしわを深くしていたアスランも、最近は肩をすくめるだけになっている。

（愛想のないアダラだけど、悪気もないってことに、みんな気づいてきたのよね）

アダラの無愛想は、なんとというか、もう性格だ。接客態度は改善すべきだが、カレンたちに対してはこのままでもかまわないだろう。

「コーヒー、淹れてあるわよ」

「ああ」

素直に自分の席に着くと、アダラはカップに口をつけた。コクリと飲んで、ほんの少し口元をゆるめる。

（あ！ 笑った）

こんな小さな笑みが、とても嬉しいカレンだった。

コクコクと飲み続けていたアダラだったが、フツと動きを止めて、顔をこちらに向ける。そのまま、カレンを見つめてきた。

「アダラ、どうかした？」

カレンがたずねると、アダラはポツリと呟く。

「……ロールサンド、美味かったそうだ」

カレンは、戸惑って目をパチパチさせる。

（ロールサンドって？ ……もしかして、お使いを頼んだ時に渡した、あれ？）

今日、アダラに買い出しを頼んだ時、カレンは思いつきでロールサンドを渡していた。特別に薄く切った一枚のパンにジャムを塗り、クルクル巻いて薄い紙でくるんだものだ。本当はラップで巻きたいのだが、この世界にラップはないので、耐水性のある薄い紙を代用している。

急におつかいに行ってもらったことになったから、お詫びのつもりで渡したのだが――